

大穴牟遲神は兄弟の神々から逃れるため、紀伊の国の大屋毘古神のアドバイスに従って、地底にある根の堅州國（ねのかたすくに）にやってきます。根の堅州國を治めるのは八岐大蛇を退治した速須佐男命（はやすさのうのみこと）です。根の堅州國で大穴牟遲神は速須佐男命の娘、須勢理毘賣（すせりびめ）に出会います。

## 9. 大国主命の冒険物語

### （3）速須佐男命の与える試練

根の堅州國で大国主命は速須佐男命の娘、須勢理毘賣（すせりびめ）に屋敷の前で出会います。二人は互いに目を見交わし、恋に落ちます。（原典：爲目合而、相婚。）  
（注：原典では「相婚」となっておりますから、結婚の約束をしたのかも知れません。）

#### ① 蛇の室屋の試練

須勢理毘賣は、父である速須佐男命に対して「たいそう立派な神がお出でになりました（原典：甚麗神來。）」と大穴牟遲神を紹介します。速須佐男命は大穴牟遲神を見て、「この者は、葦原色許男（あしはらのしこお）と言われた勇敢な神だ」とおっしゃいました。では、どれくらい勇敢で強いか試してみよう、ということで、大穴牟遲神を屋敷に招き入れ、その上で、蛇の室屋に入って、そこで寝るように命じます。（原典：即喚入而、令寢其蛇室）

（注：色許男の意味 ①醜い男、ぶおとこ ②強くたくましい男）

「蛇の室屋？」驚いている大穴牟遲神に対して、「大丈夫です、と布（比禮＝ひれ）を渡し、もし噛みつこうとする蛇がいたら、この布を三回振って下さい」（原典：其蛇將咋、以此比禮三舉打撥）（咋（さく）＝①食う ②噛む）

そこで、教えられた通り、大穴牟遲神が布を三回振ると、蛇たちは大人しくなり、蛇の室屋でぐっすり寝ることができました。

#### ② 吳公（むかで）と蜂の室屋の試練

翌朝、大穴牟遲神が速須佐男命に元気な姿を見せると、今度はムカデと蜂のいる部屋で寝るように命じられます。今回も須勢理毘賣がムカデ、蜂用の布を大穴牟遲神に与え、布を三回振るよう教えました。そうしたところ、ムカデ、蜂が大人しくなり、一晩ぐっすり寝ることが出来ました。

### ③ 野に放たれた鏑矢（かぶらや）の試練

翌朝、ムカデと蜂の室屋から何事もなかったように出てきた大穴牟遲神に速須佐男命はたいへん驚きます。そこで、速須佐男命は大穴牟遲神を広い野原に連れ出します。そして、速須佐男命は草ぼうぼうの広い野原に向かって鳴鏑（なりかぶら、鏑矢）を放ちます。そして、大穴牟遲神に対して、「あの矢を取って来ておくれ」と命じます。大穴牟遲神は「畏まりました」と野原に分け入ります。大穴牟遲神が矢を探し回っているのをみて、速須佐男命は野原の草に火を点けます。火は瞬く間に広がり、大穴牟遲神は火に取り囲まれてしまいます。（原典：亦鳴鏑射入大野之中、令採其矢、故入其野時、即以火廻燒其野。）



鳴鏑、空気が通って笛のように鳴る

どのようにしてここから抜け出せばいいのか迷っている時、一匹のネズミが大穴牟遲神の傍にやって来て「内はホラホラ、外はスブスブ」と伝えます。（原典：鼠來云「内者富良富良、外者須夫須夫」）そこで、ネズミの言う通りその場を踏みしめたところ、穴が開いてその穴に落ち込み、そこに隠れている間に、草原の火は穴の上を通り過ぎて行きました。（原典：落隠入之間、火者燒過。）

しばらくして、そのネズミは鏑矢を口にくわえて大穴牟遲神のところに持って来ます。ただ、その矢の羽は、子ネズミたちに食い千切られておりました。（原典：其矢羽者、其鼠子等皆喫也。）大穴牟遲神その鏑矢を受け取り、速須佐男命のところに帰って行きました。

### ④ 速須佐男命の頭に付いた虱（しらみ）の試練

大穴牟遲神が草原で火に巻かれているのを見て、妻の須勢理毘賣はお葬式の道具を持って来て泣いておられました。速須佐男命も大穴牟遲神が死んだと思って草原に立っておられました。（原典：於是、其妻須世理毘賣者、持喪具而哭來、其父大神者、思已死訖、出立其野。）しかし、そこに大穴牟遲神は矢を持って帰って来られました。

大穴牟遲神は鏑矢を速須佐男命に差し出したところ、速須佐男命は大穴牟遲神を広い屋敷内に呼び入れ、自分の頭についている虱を取れと命じられました。（原典：令取其頭之虱。）そこで、大穴牟遲神は虱を取ろうと頭を見たところ、虱ではなくムカデがうじゃうじゃといました。困ったな、と思っているところに、その妻が牟久木實（棕の実）と赤土を持って来て、夫に与えました。そこで、大穴牟遲神は棕の実を噛み砕き、赤土を口に含んでぺっぺと吐き出しました。（原典：故咋破其木實、含赤土唾出者。）そうしたら、速須佐男命は大穴牟遲神がムカデを噛み砕いてその唾を吐き出しているのだと思い、心の中でかわいいヤツだと思ってうとうとと眠ってしまいます。（原典：其大神、以爲咋破吳公唾出而、於心思愛而寢。）

#### ⑤ 根の堅州國からの脱出

この時、大穴牟遲神は眠っている速須佐男命の髪の毛を掴んで、その部屋の椽（たぎり＝垂木）毎に結んでしまいます。（原典：爾握其神之髮、其室每椽結著而。）その上で、五百引石（大きな岩）を速須佐男命が寝ている室屋の戸口に引き据え、戸口を塞ぎました。（原典：五百引石取塞其室戸。）

その上で、大穴牟遲神は妻である須世理毘賣を背負って、速須佐男命が所有する「生大刀（いくたち）」、「生弓矢（いくゆみや）」そして「天詔琴（あめののりごと）」を持ってそこを逃げ出します。ところが逃げる途中、天詔琴が木の枝に触れて大地が鳴動するような大きな音を立ててしまいます。（原典：逃出之時、其天詔琴、拂樹而地動鳴。）

（注：天詔琴=託宣に用いる琴。速須佐男命の宗教的支配力を象徴している。）



天詔琴を持つ須世理毘賣

この物音に速須佐男命がハッと目を覚まし、室屋の外に出ようとしてしました。しかし、髪の手が垂木に結び付けられているものですから、その室屋を引き倒してしまいます。さらに、速須佐男命が髪の手を解いている間に、大穴牟遲神たちは遠くの方まで逃げる事が出来ました。（原典：引仆其室、然解結椽髮之間、遠逃。）

#### ⑥ 速須佐男命の任命

速須佐男命は黄泉比良坂（よもつひらさか）まで追い駆けてきて、はるか遠くに逃げる大穴牟遲神に向かって大声で呼びかけ、おっしゃいました。「お前が持っている生大刀と生弓矢を使って、お前の腹違いの兄弟たちを坂の裾に追い伏せ、また川の瀬に追っ払え。（原典：其汝所持之生大刀・生弓矢以而、汝庶兄弟者、追伏坂之御尾、亦追撥河之瀬而。）」

さらに速須佐男命は呼びかけます。「お前は大國主神（おほくにぬしのかみ）となり、また、都志國玉神（うつしくにたまのかみ）となり、我が娘の須世理毘賣を嫡妻（むかひめ＝正妻）として、宇迦（うか）の山の麓に、地の底の岩根まで深く掘って、太い宮柱を立てて、高天原に届くほどの千木をそびやかした宮殿に住め、この奴め」（原典：意禮爲大國主神、亦爲宇都志國玉神而、其我之女須世理毘賣、爲嫡妻而、於宇迦能山之山本、於底津石根、宮柱布刀斯理、於高天原、氷椽多迦斯理而居。是奴也。）

（注1）黄泉比良坂（よもつひらさか）とは、生者の住む現世と死者の住む他界（黄泉）との境目にあるとされる坂、または境界場所

（注2）意禮爲大國主神＝おれおほくにぬしのかみとなり 意禮（おれ）はお前、おぬし。第二人称の卑称。

（注3）爲宇都志國玉神＝うつしくにたまのかみとなれ＝現実の國の神靈となれ。ここに根の堅州國の大王速須佐男命（言わずと知れた天照大御神の弟君）より、大穴牟遲神は“君主”となれ、との任命を受けることとなります。

（注4）是奴也＝このやっこ 筆者感想：娘婿に対する速須佐男命の親しみの表れではないか。意禮（おれ）という呼びかけも。

#### （4）出雲王国の成立

地上に戻った大國主神は生大刀と生弓矢を使って兄弟の八十神を負い退け、坂の裾毎に追い伏せ、川の瀬毎に追っ払って、出雲王国を始めて作りしました。（原典：故、持其大刀・弓、追避其八十神之時、每坂御尾追伏、每河瀬追撥、始作國也。）

（続く）

須世理毘賣と正式に結婚した大国主神は、先に約束していた八上比賣とも結婚しました。（原典：美刀阿多波志都＝みとあたはしつ＝婚姻した）そして、八上比賣を出雲に連れて来ましたが、八上比賣は正妻の須世理毘賣を畏れて、生んだ子を、木の俣に差し入れて稲羽に帰ってしまわれます。それで、生まれたその子は木俣神（きのまたのかみ）と名付けられて、またの名を御井神（みいのかみ）とも言います。

（筆者感想：八上比賣は、八十神を排して、大穴牟遲神を選んだのに、残念なことです。）

（原典：故、其八上比賣者、如先期、美刀阿多波志都。故、其八上比賣者、雖率來、畏其嫡妻須世理毘賣而、其所生子者、刺挾木俣而返、故名其子云木俣神、亦名謂御井神也。）

どうやら、須世理毘賣は嫉妬深いお后だったようです。原典にも「又其神之嫡后、須勢理毘賣命、甚爲嫉妬」という表現が観られます。というか、大国主神を慕う気持ちがいへんお強い方であった、と言うべきでありましょう。

古事記ではこのあと、大国主神は高志國（こしのくに）の沼河比賣（ぬなかはひめ）に求婚しようとして、歌（長歌）の交換し、さらに嫡妻須世理毘賣とも歌の交換をするというお話になります。そして、大国主神のご神裔についての記述が続きますが、それらの部分は端折って、今回は大国主神の国作りのお話です。

大国主神から送られた歌（略）に返して、須世理毘賣命が、大御酒杯を取って、大国主命に送った歌（一部）は以下の通りです。

やちほこの かみのみことや あがおほくにぬし なこそは をにいませば  
夜知富許能 加微能美許登夜 阿賀淤富久邇奴斯 那許曾波 遠邇伊麻世婆  
うちみる しまのさきざき かきみる いそのさきおちず わかくさの  
宇知微流 斯麻能佐岐耶岐 加岐微流 伊蘇能佐岐淤知受 和加久佐能  
つまもたせらめ あはもよ めにしあれば なおきて をはなし なおきて  
都麻母多勢良米 阿波母與 賣邇斯阿禮婆 那遠岐弓 遠波那志 那遠岐弓  
つまはなし  
都麻波那斯 (以下省略)

（注：おちず＝もれずに [どこででも]）